
メモリー・オブ・サマー

結愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メモリー・オブ・サマー

【Nコード】

N4155A

【作者名】

結愛

【あらすじ】

優奈は1つ上の彼氏をもつ普通の中学2年生。夏休みのある日、デートをすることになりますが・

ある夏の朝

その日は朝から太陽の照りつける暑い1日だった。

中学2年生になる井川優奈は、朝6時すぎに目を覚ました。

学校は1週間前から夏休みで、いつもなら9時すぎまで眠っているのだが今朝は違う。

1カ月前に彼氏になった1つ上の高梨慎也と休みに入って初めて会う日なのだ。

優奈が慎也に一目惚れをしたのは、1年の2学期だった。

その日、優奈は親友の千沙と菜月と一緒に、次の授業に備えて早く体育館に行った。

そしてそこでバスケットをしている1人の男子生徒に目が釘づけになった。

次々と上手にシュートを決めていき、その度に最高の笑顔を見せる。その日から優奈はその笑顔のとりこになった。

いつもはのんびり屋サンとか天然ボケなどとからかわれる優奈だったが、この時は必死に慎也に近づこうと努力した。

幸い、慎也はすぐに優奈に心を開いてくれた。

テスト中には勉強を教えてもらい、バレンタインにはチョコを渡した。

決して口数はおおくない慎也だったが、それでも校内で会うと声をかけてくれるまでになった。

そして今から約一カ月前、千沙や菜月、それに慎也の友達の協力があって無事、彼氏・彼女の中になったのだ。学年が違うこともあって、なかなか一緒に何かをするという機会には恵まれなかったが、それでも電話やメールなどを使って少しずつ恋を育ててきた。慎也は優奈にとって生まれて初めての彼氏だった。

優奈の通う桜庭中学校は同じ学区内の2つの小学校から生徒が集まっている。優奈の通っていた小学校と慎也の通っていた小学校は電

車で10分ぐらいの距離で、同様に家もそれくらい離れている。慎也が優奈の地元で遊びたいといいだしたのは夏休みに入る前の日だった。

もちろん優奈は二つ折りで返事をし、今度は先輩の地元にも行かせてくださいねと約束も取り付けた。

毎晩寝る前にあと何日と指を折り、そして今日に至った。

慎也とは駅近くの公園で9時に待ち合わせをしている。

優奈は悩んだ末にやっと決めた水色のノースリーブのサマーニットにスリットの入った黒のミニスカートをはいて、9時10分前に公園に着いた。

日曜日の公園では親子連れが何組か楽しそうにバドミントンやキャッチボールをしている。

少し踵のある黒のミュールと爪に塗った薄いピンクのペディキュアの色を確認しながら、慎也を待つ。慎也が来たのは9時を少し過ぎたあとだった。黒のTシャツに赤と白のチェックのパーカー、それに少しダボツとしたクラッシュデニムのジーンパン。身長172センチの慎也にはそれがとてもよく似合っていた。

「おはよ。ごめん、待った？」

目印の時計台の下に来た慎也がはあはあと息をしながら聞く。どうやら走ってきたらしい。額には汗が滲んでいた。優奈は首を振ると「どこ行きましたか？」

と聞いた。慎也は

「優奈ちゃんがちっちゃい頃に遊んでた場所。」

と答える。優奈は少し考えてから

「ちよつと歩くんですけど山があるんですよ。そこ、行きましょう。」

と聞いた。

二人の世界。

優奈は慎也を連れていく場所を小さい頃に、よく遊んだ山に決めた。ここは家から少し遠いこと、道は一応舗装されてはいるが狭いことなどを理由に大人からは禁止されていた遊び場だったが中学生になった今はもう大丈夫だろう。

小さい頃、この山を登って向こう側に降りることは大冒険だった。小さいとはいえ一つの山を越えた喜びについつい浸りすぎて、気付いた頃には周りが真っ暗だったなどということもよくあった。

山道を登っていくに連れ、だんだん緊張もほぐれていき、優奈の顔にも笑顔が戻る。歩きながら、慎也はいろんなことを教えてくれた。いつも一緒にいる友達のこと、団結力のあるクラスのこと、4つ上の姉のこと。慎也のことを1つ、また1つと知る度に優奈はどんどん嬉しくなる。今夜、千沙や菜月に何て報告しよう？そんなことを考えるだけで自然と顔がほころんできた。

小さい頃は

「大冒険」

だった山も、30分程で下りに差し掛かった。

幼い日の記憶を頼りに思い出せば山を降りた先には山に囲まれた小さな集落があったはずだ。

この集落に住んでいた小学校の同級生が毎日通うのが大変だとぼやいていた記憶がある。

ポシエツトからハンカチを出し、額に滲んだ汗をそっと拭く。残りの道が直線の下り坂だけになると、遠くから祭り太鼓のような音が聞こえてきた。澄み切った青い空に響くにぎやかな声と太鼓の音。山を切り崩して作られた集落の入り口に小さな看板が立っていた。舗装されていない砂利道の上を浴衣や甚平を着た人たちが次々に歩いていく。

「この時期に夏祭りとか珍しいな。」

古ぼけた看板を見ながら慎也がいった。山の切り口と古い民家の間の道にズラツと出店が出ている。

「あたし、ここでこんなお祭りやってるの今日まで知らなかったですよ。」

優奈が驚いたようにいう。

「知らなかったって、ここ地元じゃん。」

慎也がハハツと苦笑しながらいった。

「まあ、そうなんですけど・・・。」

優奈がプクツと頬を膨らます。

「いいじゃん。行ってみようよ。」

慎也はそういうと優奈の手を取った。その瞬間、優奈の心臓がドキンドキンと高鳴り始める。

「そんなに緊張されたら手繋ぎにくいんだけど・・・。」

少しぶつきらばうらない方がいい方はいつもと変わらなかったものの、慎也は優奈の指の間にそつと指を絡ませた。初めて触れた慎也の手は想像以上に大きく暖かい。優奈が躊躇いがちに力をこめると、ぎゅつと握ってきた。

夏祭り。

たこ焼き、焼そば、わたがし……。いろいろな種類の店が軒を連ねている。

優奈は慎也と手を繋ぎ、歩き始めた。

山に沿って微妙な上り坂になっている細い道は足元がおぼつかない幼児から腰のまがった老人まで、どこにこんなに隠れていたんだろうと思うくらいたくさんの人でごった返している。しかしどの顔にも笑顔があつた。金魚すくいやおもちゃ屋さん、いろんな店を覗きながら進んでいくと、古ぼけた小さな店が右手に見えてくる。

「ちよつと見てく？」

じつと見つめる優奈に慎也が聞くと、優奈はコクンと頷いた。重いガラス戸を押して店内に入ると、中はパン屋だった。

少し薄暗い店内ね棚には何種類かのパンが並び、入り口の正面に1人の老婆が座っている。優奈は白いトレーにクリームパンとカレーパンを取った。老婆の前の机に置くと、老婆はパンパンと電卓を押す。190という表示を見てから、優奈はポシエットから財布を出した。すると先に慎也が100円玉を2枚、机の上に置く。

「オレ、おごるから。」

慎也はそういつて老婆からお釣りを受け取った。茶色の紙袋に入ったパンは腕の中でまだほんわり暖かい。パン屋から少し離れた所に横に長い黒い小屋があつた。黒いカーテンで囲まれた入り口には

「おばけ屋敷」

と書いてある。

「なんか暑いし、ちよつと入ってみねえ？」

額の汗を拭いながら慎也がいった。

入り口の横に入場料50円とある。

慎也が小さな窓口で100円玉を差し出すと、しわがれた手が出てきて入り口の方を指差した。

ギリギリ大人が2人通れるぐらいの通路を手を繋いで進んでいく。慎也の手を握り締める優奈のはじんわりと汗ばんでいた。10メートルほど歩いていくと少し広い空間が広がっている。その真ん中に学校で使うような机と椅子が置いてあった。その上には裸の豆電球が揺れている。机の上にはレトロなパンダのポーチが置いてあった。中にはキャンディーが入っている。

「すごい。可愛い・・・」

薄暗い明かりの下で優奈がホントに嬉しそうに笑う。すると慎也は突然優奈の肩をグツと引き寄せ、キスをした。唇が触れ合ったのはほんの一瞬だったが優奈は驚いて目を見開く。

「もう一回していい・・・？」

慎也が少し擦れた声で聞く。優奈はコクコクと頷いて、顔を上げた。ドキドキしながら目を閉じる。今度はちゃんと唇の感触を感じた。

恋い焦がれた人との初めてのキス。おばけ屋敷の小さな部屋で、優奈は最高の幸せを感じていた。

神社での出会い。

おばけ屋敷の出口は小屋の裏側だった。手口のすぐ前に数段の石段がある。

「行ってみよつか。」

初めてのキスを終え、少しバツが悪そうな顔で慎也がいった。優奈ははにかむような笑みを浮かべて頷く。石段を上がると、そこはこの古びた集落には似付かわしくない小さな神社だった。綺麗に小さな石が敷き詰められていて、恐いぐらいに静まっている。誰もいないようだった。

「せっかくだからお参りしてこっか。」

慎也はそういうと優奈の手を引っ張った。

「何、お願いしたんですか？」

手を合わせたあと、優奈が少し上目遣いに慎也を見る。

「えー・・・これからもずっと優奈ちゃんと一緒にいられますように・・・かな？」

そういつてから慎也は照れ臭そうに笑った。優奈の頬がポツと赤くなる。普段は絶対そんなこといわない慎也だから余計に嬉しかった。その時、社の後ろから真っ白な着物を着た老人が出てきた。髭も髪も眉毛も真っ白で険しい表情をしている。優奈と慎也が突然のことに躊躇していると、地下からはい上がってくるような声で

「決して後ろを振り返ってはならぬぞ。」

といった。

「・・・え？」

慎也が思わず聞き返す。しかし老人は背中を向け、社の後ろに入ってしまった。

「何なんですかね？今の・・・」

再び静寂が戻った神社の真ん中で優奈が首を傾げる。慎也もしばらく考えていたが、やかで

「これからの人生の教訓ってやつじゃねえ？ここ、一応神社だし・

」
と笑った。

「もう行こ。」

まだ考え込んでいる優奈にそういつてから、石段を下り始める。優奈も慌てて後を追いつ、神社を後にした。

林の奥で。

再び出店に戻ると相変わらず多くの客でにぎわっていた。千沙と菜月に何から話そうか？手を繋いだこと？キスをしたこと？優奈は自分のちよつとした進展でも我が事のように喜んでくれる2人の親友の顔を思い浮べ、ますます嬉しくなった。自然と足取りも軽くなる。「マジすごい人だねー。それにメチャメチャ暑い。」

慎也はそういいながら、片手でTシャツに風を入れた。優奈の背中にもサマーニットが汗で張りつく。ミニールをはいた足も少し痛くなってきた。

「あ、行き止まりだ。」

慎也の声に顔を上げる。前は高い竹が生えたむき出しの林で

「立入禁止」

のロープが張られていた。気が付くとあんなに多かった人もまばらになっている。

「ちよつと行つてみよ。」

まわりに人目がないことを確認し、慎也がいった。

優奈は何か少し恐そうだと思つたし、蚊がいそうで嫌だったが、せっかく雰囲気がよくなくなってきた慎也との仲を壊したくなくて頷いた。慎也はロープをまたぎ、後ろを振り返る。優奈もパンツが見えないようにスカートを押さえ、またいだ。竹と竹との間は人1人通れるかぐらいの隙間で優奈は慎也の後を着いていく。

「でもホントに人いっぱいいましたねえ。」

優奈は自分が通りやすいようにと草木を除けながら進んでいる慎也に話し掛けた。

「そうだねー。でも優奈ちゃん、地元なのに1人も知り合いに会わなかったねえ。」

慎也が手で小さな竹をはねのけながらいう。

優奈はその言葉にハツとした。

慎也と一緒にいるから少し頭が麻痺していたが、あまり足を運んだことがないとはいえ、ここは自分が14年間育ってきた地元なのだ。ましてや今は夏休み真っ最中で、しかも今日は日曜日である。なのにあんなにすれ違った人の中に知っている顔は1つもなかった・・・改めて気付かされたその事実には恐怖すら感じた。

「ね・・・ねえ、先輩、そろそろ戻りませんか？」

優奈は自分より20センチほど高い慎也の背中に話し掛けた。すると突然慎也が立ち止まる。優奈はモロに慎也の背中で鼻をぶつけ、「どうしたんですか？」

と尋ねた。慎也は何も答えなかったが、握り締めた拳が微かに震えている。何だろう？と優奈は体を横にずらし、慎也の前に出た。慎也の視線の5メートルほど向こうに何かが横たわっている。恐る恐る近づくと、その物体は見慣れた制服を纏っていた。白いシャツに赤いネクタイ、チエツクのスカート。それは優奈が着慣れた桜庭中の制服だった。ポシエットを握り締めた手がブルブルと震える。黒い物体の正体はすでに腐敗が進んだ人間だった。制服のスカートと振り乱した長い髪で辛うじて判別できるその女の顔は目があった。ただろう2つの穴と口にぎっしりと蠅や蛆虫が隙間なく詰まっている。手足にも数えきれないほどの虫が集っていた。

「やつ・・・」

優奈が口を押さえる。

「帰ろう。」

慎也はそういうと優奈の手首を掴み、走りだした。途中何度も手足を木や草で傷つけたが、慎也は止まらない。優奈はただただ涙をこぼしながら走った。今にもあの女に足首を後ろから掴まれそうで恐かった・・・

疑問点

どこをどう走ったかわからないくらい走って、やっと立入禁止の口ープまで辿り着いた。慎也は少し腐りかけた机と椅子がある場所まで走り、やっと足を止める。店が無い西か、周りにはほとんど人はいなかった。慎也はしばらく荒い息をついていたがどうにか呼吸を落ち着けて、優奈に

「大丈夫？」

と聞いた。優奈の手足はあちこちが切れ、血が滲んでいる。優奈はしばらくしてから、やっと

「・・・あの人、誰？」

とだけいう。慎也は頭を抱えていたが、

「多分・・・高政由希子さん・・・だと思う。」

とつぶやいた。

「知り合いなんですか!？」

優奈が驚いて顔を上げる。慎也は優奈の顔を見てから、小さく首を振った。

「オレの1つ上の先輩。あの人が2年の時に急に行方不明になって・
・最初はみんな誘拐とか拉致とかいろいろ騒いでたんだけど、でもだんだんそういうのって忘れられていくもんじゃない? オレも完璧忘れてたんだけど・・。あんなとこにいたんだ・・。」

慎也はそういうと綺麗にワックスで上げていた髪をクシャクシャと掻いた。額に手を当てたまま、ハアツとため息をつく。

「とにかく・・・ケーサツに電話・・・。」

慎也はポケットから携帯を出した。優奈は信じられないという顔で空を見上げる。ギラギラと太陽が照りつけていた。どうして、あの人は死んじゃったの? どうして、あそこにいたの・・・? 優奈の頭をグルグルと同じ考えが回る。しかし慎也のイライラした声で我に返った。

「マジかよ・・・圏外だし・・・」

慎也が柔らかい土の上に携帯を投げる。優奈も慌てて携帯を取り出したが、同じように圏外だった。

「何だよ、これ！ここ、そんなに電波悪くないだろ！？」

そういいながら慎也が空を見上げる。待つて・・・優奈は自分にか聞こえないような声でつぶやいた。そもそも、ここはどこ・・・？山に囲まれたあの小さな集落が、どうしてこんなに広いの？今更ながら気が付いた疑問点に口の中が乾いていった。

狂い始めた齒車

2人がうなだれ座り込んでいると、下の方からにぎやかな人の声が聞こえてきた。青い甚平を着た5歳くらいの男の子と紺の浴衣を着た母親らしき女を筆頭に56人の人がこちら向いて歩いてくる。その男の子の手にはリンゴ飴が握られていて、それを得意気に母親に見せていた。助けて！優奈がそう叫ぶ前に立ち上がった慎也が

「すいません。」

と声をかけた。しかしその母親はこっちをチラツと見ることもなく前を通り過ぎて行った。

「聞こえなかったかな？」

慎也が首を傾げる。今度は人のよさそうな老夫婦がゆつくりと歩いてきた。杖をつく老父を老婆が支えている。しかし慎也が声をかけても、その夫婦もまた何も聞こえなかったように無言で2人の前を通り過ぎて行った。

「どういうこと！？・・・どうして・・・みんな無視するの？」

優奈はもう訳が分からないというように頭を抱え掻き毟った。

「優奈ちゃん、さっきのパンある？」

しばらく考え込んでいた慎也が突然口を開く。

どうして、こんな時にパンなの？優奈は幾分不審に思ったがもう聞き返す気力もなく、黙って紙袋を差し出した。慎也は紙袋を受け取ると、おもむろに中身を地面にぶちまける。丸い物体がころころと地べたに転がった。しかし、それは店の棚で見たあのパンではなく、すでに異臭を放つ腐敗物と化している。

「ひゃっ・・・」

優奈は思わず叫び、座ったまま後ろに後ずさる。

「もう訳分からない！どうなってるの・・・？」

優奈はそういうと頭を抱え再びうなだれた。すさまじい恐怖に鳥肌がうつすらと立つ。目からボロボロと涙がこぼれた。むき出しの肩

がガタガタと震える。慎也は立ち上がると優奈の隣に腰を降ろした。全面に細かい鳥肌が立った腕にそっと触る。慎也は優奈の肩をグツと引き寄せ、力づくで体を抱き締めた。

「嫌・・・もう嫌っ！」

優奈が狂ったように叫ぶ。身にまとわり付く何かを振り払うように身を震わせ、叫び続けた。

醒めた夢。

慎也はただ優奈を抱き締め続けた。

激しく嗚咽する優奈の背中を撫でながら、この夏祭りに足を踏み込んでからのことを思い返す。

すると突然さつきまで雲1つなかった空を真っ黒な雲が覆い始めた。数分も経たないうちに辺りが暗くなり、ゴロゴロと雷が為りだす。やがて真っ黒な空から冷たい雨が降り始めた。

慎也は優奈の体を少しでも雨から守ろうと庇うように抱き締める。

優奈の頭に顎を乗せる様にして、何か見落としている点はないかと考えた。

雨はどんどん激しさを増していき、慎也の額に濡れた髪が張りつく。すると突然背後で何かものを引きずるような音がした。恐怖で背中が冷たくなる。恐る恐る振り返ると、坂の上に黒い物体が見えた。それは少しずつ近づいてくる。小さい方は青い甚平を纏っていつて、大きい方は紺の浴衣を纏っていた。雨の水圧で体にはブスブスと穴が開いていき、無数の虫が周りを飛び回っている。その顔は林の中で見た

「高政由希子」

と瓜二つだった。慎也の体がガタガタと震え始める。

「・・・先輩？」

ただことじやない慎也の様子に優奈が顔を上げる。

肩越しに後ろの光景を見て悲鳴をあげた。

慎也は歯を食い縛り、ヨロヨロと立ち上がる。

上手に力の入らない腕で優奈を立ち上がらせた。

雨水をぐっしりと含んだポシエットを掴み、優奈の手首を握る。

戸惑う優奈の手を引っ張って走りだした。

雨を顔に受けながら慎也は無我夢中で走る。

2人で手を繋ぎゆっくり上がってきた道を、今度は全速力で走り抜

けた。不思議なことにあんなにたくさんいた人々の姿が今はどこにもない。その代わりに背後に迫ってくるズリッ、ズリッという音は次第に大きくなっていく。今にも引きずり込まれるのではないか・・

。そんな恐怖に優奈は何度も後ろを確認しようとする。

「優奈！振り返るな！」

突然前を走る慎也の鋭い声がする。

ハッと神社で聞いたあの老人の言葉を思い出した。

あのおじいさんは誰なの？ホントにここはどこ？優奈の頭はますます真っ白になる。

何も考えられずにただひたすら走ることだけに全力を注いだ。転がるように坂を下り、やっとあの山のふもとが見えてきた。細い道路を渡り、空き地に辿り着く。そこまで行くと急に体の力が抜け、座り込んだ。汗と涙と雨で顔はグショグショだったがもう拭う力も残っていない。そのまま意識が遠くなっていった。

紙の上の真実

気が付くと目の前には真つ白な天井が広がっていた。涙を浮かべた母・香純が覗き込んでいる。

「大丈夫？あなた3日も眠ったままだったのよ？それにどうしてあんなところにいたの？何があったの？偶然車が通りかかったからよかったですもの・・・」

香純の言葉がぼんやりと頭に入ってくる。手には点滴が繋がっていた。体を起こすと、部屋の隅には同じく心配そうな父・大樹と弟・祐樹がいる。

「・・・先輩は？」

思わず香純の顔を見る。その時トントンと部屋がノックされ、慎也が入ってきた。ジーパンとＴシャツに着替えている。頬に白いガ―ゼを貼っていた。

「3日ぶり。目覚めた？」

慎也が少し笑みを浮かべて優奈に聞く。優奈は1、2回頷いてから「あれ、何だったんですか？」

と慎也の顔を見つめた。香純が不安気に慎也を見る。慎也はフウツとため息をつき、優奈の前に新聞を置いた。大きな見出しで

「無惨！小集落の悲劇」

と書いてあり、写真が載っている。日付は3年前になっていた。読み進んで行くに連れ、優奈の手が細かく震えだす。

「元から存在してなかったんだよ・・・あの集落は。土の下に埋まっていたから・・・だからきつとケータイも圏外だった・・・」

静かな声でそういうと、慎也は脱力したように丸椅子に座った。

「冷静に考えてやつと気付いたんだ。祭りにはぎわってただけ、客も出店の店員もパン屋のバアさんも誰1人としてオレらに話し掛けてこなかった・・・これはオレの仮説だけど、あの集落の人は多分もう誰も生きてはいない。あの祭りは同じ集落に住む人間だけに受

け継がれた伝統だったと思うんだ。だから他からきた

「よそ者」

のオレ達には誰も話し掛けてこないし、オレ達の話だって聞かない・。
」

慎也はそこまでいうと天井を向いてため息をついた。

優奈の目には自然と涙が溢れてくる。豪雨により土砂崩れ発生、生存者絶望的……。布団の上の新聞紙に印刷された黒い文字が涙で滲んだ。学校に通うのが遠くて大変だ、中学校は山の小さな学校に通う。そんなことをいつていた友達が卒業式にはいなかったことをどうして思い出さずにいられたのだろう……。

「でもどうしても1つだけわからないことがある。」

優奈が小さく嗚咽を始めると慎也がいった。

「神社で会ったあの人は誰なんだ？あの人は確かにオレ達に決して後ろを振り返ってはいけないうっていった……。」

慎也がまた天井を見上げる。少しの間、目を閉じてそれからまた口を開いた。

「目覚めた後オレらを助けてくれた人に話を聞いたんだ。あの日、雨すごかったじゃん？オレ達が倒れていたすぐ後ろで、また土砂崩れが起きたらしい……。逃げる途中で、もしあのじいさんの言い付けに背いて後ろを振り返ってたら……。多分2人共死んでた……。」
語尾が少し震えている。

「……。先輩、あの女の人？」

優奈がハツと思い出したように聞く。慎也はサイドテーブルの上にあった新聞紙を取り、布団の上に置いた。

「「神隠し」

の中学生、2年ぶりの帰宅」

とある。髪を2つに結んだ女の子が高政由希子さん（当時14歳）と書かれた文字の上で笑っていた。

「由希子さんは、あの後ちゃんと発見されたよ。どうしてあそこにいたかはわからないけど……。でも案外ホントに神隠しにあったの

かもしれないな・・・」

慎也が静かにいった。優奈の頬をまた熱い涙が流れる。一度あふれ出た涙はしばらく留まるところを知らなかった。優奈はただただ泣き続けた。林の中で無惨な死を遂げた少女のこと、夢や希望を持たまま冷たい土の下に沈んでいった友のことを思っで・・・。

紙の上の真実（後書き）

後日、無事退院した優奈は慎也と一緒にあの集落の跡地に行った。花を傾け、手を合わせる。時季外れの冷たい風が今もなお土の下で眠り続ける人々の魂を慰めるように優しく吹き抜けていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4155a/>

メモリー・オブ・サマー

2011年1月2日14時08分発行